

M E S S A G E

木の国 —日本とフィンランド

2002年に私が参議院議員に初当選したとき、母国フィンランドの幼なじみから素晴らしいメッセージが届きました。

「あなたが遠い日本で国会議員になられたことを、村の森に報告します。もしあなたが現在も故郷の森を恋しく思うのなら、その森もきっとあなたを見守り、祝福することでしょう。」

森はすべてのフィンランド人に多くの祝福と恵みを与えています。フィンランド人にとって森は守り神です。1939～40年の「冬戦争」でも、フィンランドが大国ソ連と戦い、独立を守り通せたのは森のお陰だったと人々は信じています。また現在のフィンランドの経済も森林に支えられています。木材の輸出は国の主要産業の一つだからです。

私の生家は酪農家で森林が20haありました。私自

身も父を見習い、木を切る仕事もやりました。切り出した松の丸太を湖面に浮かせ、その上に乗り、船で曳いて運ぶ仕事も体験しました。長い冬の夜には、家の中で白樺の皮を編みバスケットや鞆を作りました。父が大工だったので木の家造りも手伝いました。秋には家族総出で森へ出かけ、野生のコケモモやブルーベリーなどの木の実やキノコを食材として集めるのが日常の仕事でした。森は文字通り私を育ててくれたのです。

私と同様、多くのフィンランド人は森と親しく暮らしています。フィンランド人は今もなお木々と共存する森の民なのです。森は彼らの原動力になっています。フィンランドの森は優しく暖かく、そこで暮らす人々の心に落ち着きと癒しを与えます。森はまさにオアシスであり聖地でもあります。現代人は森の中で忙しい日常生活から解放され、元気を取り戻すことができるのです。

フィンランドの木の文化は本物志向です。建物も家具

も偽物や見せ掛けだけのものを許しません。子どものおもちゃもプラスチックより木製が人気で、日曜大工では木工品を作るのが盛んです。都会でも家の修理や家具を自分で作ることが自慢なのです。

日本もまた古くから木の文化を誇る国です。「木霊」という言葉があるように、日本でも樹木や森に神の魂が宿っているとされています。木の家は環境に優しく健康にもよいと考えられていますが、残念ながら現在日本で使用される木材の大半は輸入に頼るようになり、そのため国内の森林は荒廃しました。都市においても生活の中の木の文化が廃れ、木が与える潤いや安らぎが暮らしの中から失われています。

我々は木の文化をもう一度見直さなければなりません。森は様々な形で、今なお我々に多くの恵みを与えてくれるからです。森のおかげでこれまで大気中におけ

るCO₂のバランスが維持されてきた訳ですが、今はCO₂の排出量が過剰になり、森の力だけでは全てを吸収できません。人間の力で森林を増やし、地球温暖化を抑えることも必要です。

日本でも住まいとしての木造建築を見直すべきです。木は建物になっても生き続け、呼吸をします。人間は木の家のほうが長生きできるという統計もあります。本来、「休」という字は「人が木に寄り添う」ことを表わし、英語で「forest(森)」は「for rest(休むために)」を意味しているという説もあります。日本人とフィンランド人の長寿の秘訣は「木の文化」に由来しているのかもしれない。

できれば私も、木の家に住みながら、100歳まで長生きできることを願っています。

自称「森男」 ツルネン マルテイ

フィンランドの森(写真提供:ツルネン マルテイ)

ツルネン マルテイ

TSURUNEN Marutei

■プロフィール:

1940年フィンランド北カレリア生まれ。1967年キリスト教会の宣教師として来日、1979年日本に帰化。日本古典文学の翻訳、英会話塾経営などを経て1992年神奈川県湯河原町議会議員に当選。2002年参議院議員初当選。現在2期目。

